

令和7年度第1回 静岡県立伊豆の国特別支援学校
伊豆下田分校学校運営協議会

1 日 時 令和7年5月27日(火)午前9時30分から11時30分まで

2 場 所 静岡県立伊豆の国特別支援学校伊豆下田分校 図書休養室

3 参加者

学校運営協議会委員

氏 名	所 属 等
高橋 栄彦	広岡西区 区長
村木 康隆	社会福祉法人伊豆つくし会ワークあおぞら事業所長
徳島 一信	株式会社開国 取締役
村田 美菜子	伊豆の国特別支援学校伊豆下田分校PTA会長

学校教職員

職 名	氏 名	所 属 等
校 長	松本 仁美	
副校長	廣瀬かよ子	
部主事	鈴木 雅枝	小学部
部主事	千葉 俊和	中学部
教 諭	岩城 美絵	教務課長 小学部

4 内 容

- (1) 本校の概要説明及び校内見学
- (2) 校長挨拶
- (3) 学校運営協議会委員任命
- (4) 学校経営計画の説明と承認
- (5) 協議テーマ『伊豆下田分校の課題について』
- (6) コンプライアンス委員会

5 議事録

- (1) 本校の概要説明及び校内見学
- (2) 校長挨拶

校長:先日県議会議員が、本校を視察。分校のある賀茂地区の少子化や学校の在り方等、伊豆半島全体を気にかけてくださっていた。学校も地域も今までの発想ではなく、新しい発想で考えていかなければいけない時期になっている。いっぱいアイディアを出し合って夢を語っていききたい。

- (3) 学校運営協議会委員任命
- (4) 学校経営計画の説明と承認

副校長:経営計画と課題について説明

(5) 協議テーマ『伊豆下田分校の課題について』

課題①「災害対策」津波浸水区域であり、一時避難後の対応や二次避難所までの移動が課題

委員： 防災頭巾と、ヘルメット、児童にとってどちらがより安全で使いやすいか。

下田小学校児童が持っているライフジャケットは、津波に有効なのか。分校も用意してはどうか。

部主事： ライフジャケットは、寒いときの防寒着としての効果も、考えられる。

副校長： 確認して、用意を検討したい。

校長： 以前勤務した特別支援学校で、東日本大震災が起きた。児童生徒がとっさに避難の体制をとることができた姿を見て、毎月の訓練の有効性と大切さを感じた。一回でもやっておくと、いざというときに違う。避難体制を取り、避難場所へ行ってみる体験は大切である。

以前勤務した別の特別支援学校では、多方面へ分散して車で避難する訓練や原発事故発生時の訓練、J アラートの訓練など、様々な想定をして訓練を行っていた。

委員： 下田市の意識は弱いと感じる。行政頼みではなく、自分たちでどんどんやっていくべきと感じる。

校長： 伊豆の国市は関心があり、学校へも市の危機管理課が何度も来たり、避難所設置のため、本校を一般避難所とする協定を結んだりして、具体的に校内の開放エリアも決めている。

校長： 地域と共に行う訓練は、本来は学校が呼びかけるのではなく、市から呼びかけていくべき。学校独自でやっていると広がらないから、地域へも呼びかけることは大切だが、学校だけや学校からの呼びかけだけで終わらないようにしたい。

課題②「小規模化」分校児童生徒数の減少傾向、集団での学びの機会や活動の小規模化が課題

校長： 何を学ばせるかが学校にとっての最初の目的。少人数だからと、ただ地域と一緒にみんなやってみる等、集団だけ求めていくのは特別支援学校のわがままになる。カリキュラムあつての学習なので、学習の成果を果たすことが第一の役割である。

今は、ZOOMもある。地域の人や地域の学校、伊豆の国特別支援学校本校とZOOMでつながっての学習など、学習の成果と工夫を考えていく。

校長： 賀茂地区は、教員不足や教員の育成も課題である。

委員： 特別支援学校は個性や個人を伸ばす場だと思う。集団はあまり考えなくていいのではないか。世の中に出たら、集団行動はあまりなく、チームの中で役割として動くことが多い。学校経営計画にも個人的な個性を伸ばしていく教育が書かれている。児童生徒数減少の課題より、一人一人の個性を伸ばして適材適所で伸ばしていく方針がよいのではないか。

委員： 教員不足のことでは、下田市は、2拠点生活等で色々な人材が他の地域からきている。東京で仕事して、週の半分は下田で生活する人もいる。その交通費や家賃をサポートするという取り組みの自治体が、今後も増えていくと思う。

委員： 福祉に特化した人、IT企業でパソコンに堪能な人が、この地域に来て、余暇を子供たちとかかわってリフレッシュしたり得意分野のプログラミングを地域で教えてくれたりすることもあり得る。外部人材のそのような活用という視点をもってはどうか。

さらに、パソコンやプログラミングは、子どもたちの興味や得意分野で、予想以上にできることがある。将来、人とのかかわるのが苦手なら在宅で取り組み、就労にもつながる可能性がある。

校長： 牛乳パックの紙すきの作業学習も、ずっとこれでよいのだろうかという視点も必要。作業学習で、子どもたちにどのような力がついたか、どのように変わったか、検証をしていく。常に考え方や発想を変えていかななくてはいけない。

委員： 少人数であるメリットを生かして、道具等をどんどん購入して効果的に使っていく。防災であれば、車いすを引く電動自転車的なものを購入したら、先生たちが災害時に人力で引っ張っていく課題が改善される。パソコンの機器も、本校は児童生徒が200人いたら、全員に購入するとすごい経費になってしまうが、分校は少しの数の購入でもみんな使えて、効果の実証実験ができる。子どもたちの苦手さをサポートする機器を活用して、高等部や社会に出てからの力にしてはどうか。

課題③「キャリア教育」夢や願いをかなえる進路先や社会生活のモデルや選択肢が少ない。

委員： 賀茂地域の中学部・高等部卒業後の進路先の福祉就労施設が少ない。ニーズに対して定員がいっぱいで、一度他の地域に出て、空くのを待つ流れになってしまっている。一般就労先も、主に観光業になってしまう。さらに賀茂地区は、エリアが広いため、利用者の送迎や就労者の通勤の難しさも課題である。
でも仕事がないわけではない。ITを活用した事業が今後必要になってくると思われるので、パソコン等を使った学習やタブレット操作などで、仕事につながる力を学校のうちから伸ばしてほしい。下田市のアピール動画づくりなども、地域に生きることとして、取り組めるのではないか。

委員： 本校のある伊豆の国市の方に行けばたくさんある施設も、賀茂地区はどこも定員いっぱいの現状。特に松崎町や西伊豆の方は、進路先や福祉就労先がどのようなものがあるってどのような活動をしているかを想像することもできないかもしれない。

委員： 学校から面談等で、卒業後の生活や進路のことを聞かれても、先が見えなく知らないから選べないし答えられない。自分が動いて情報を得ないとなのだが、仕事や家族の生活もあって、情報を得ていく方法がわからない。地域的に病院に行くだけでも、静岡までは遠く、多くの時間を取られてしまう。

本校のPTA会長と電話で話す機会があり、本校へ行ってみたいと感じた。保護者はみんな、情報や友達やコミュニティーがほしいと思っている。ただここにはなかなか難しい。行きたいけどいけない、もどかしさを保護者はみんな抱えていると思う。

情報がないのが一番つらい。繋がって情報を得て、ここにはないならここから出て行って探してと考えていきたい。

賀茂地区の遠距離での受診の大変さを言い続けてきた中で、病院がオンライン診療を始めてくれた。伝えていくことで、何かかかわってきているとは感じる。

校長： 本校では、PTAが定期的に集まって、情報交換や悩みなどを話す座談会を持っている。保護者が大型バスで、進路先を何か所か見学に行く取り組みもある。座談会や見学に来られない人もいるが、そういう機会がたくさんあることは大事であると思うし、行った人に聞くなどして繋がりを作って広げていけるとよい。

(6) コンプライアンス委員会

副校長： 令和6年度の取組結果や不祥事報告と令和7年度の計画の説明

各委員の会社や施設でのコンプライアンスへの取り組みの紹介

委員： 会社では、時代に合わせてその都度ルールを変えていっている。社員同士の連絡はラインや社内チャットを使っている。自由な時間に見られること、なんでも意見を言い合える環境で、やり取りをだれでも見られるように可視化する。そのことでオープンにできないことはしないということにつながる。

委員： コンプライアンスの研修は定期的に実施。運転業務も、常に人に見られているという意識を持つように伝えている。交通事故対応も、とっさの時に正しく対応できるように、すべきことを書いたメモを財布の中に入れておく体制にしている。

委員： ハラスメントがいろいろある中で、今は、指示や指導も「それってセクハラですよ」と、ハラスメントを武器にしてくる人もいる。自分たちが正しいハラスメントの知識を持って、正しい情報を伝えていかないといけないと思う。学校はカスタマーハラスメント対策もしなくては行けなく大変と思う。

委員： ハラスメントと言われると、本当に伝えなくては行けないことが伝えられないことがある。自分のところは、「命にかかわるということだから中途半端なことは絶対にダメ」「お客さんの命を守る」ということが土台にあって、だから受け取り側も分かってくれる。学校は保護者の考え方も多様であり、なかなか難しさもあると思う。保護者も、一概に良い悪いではなく、本当に教えなくては行けないことや危険な時の学校の対応など、信頼関係をもって理解しなくては行けないと思う。学校対保護者ではなく、保護者間で話し合うことも必要である。

校長： 教育へのリスペクトプロジェクトの説明。